

## 共同研究プロジェクト

# 大学教育の視点から本学の教育を考える

## 2015年度活動報告

澤 達大・中村 博幸

最終年度となった今年度、本研究プロジェクトでは「初年次教育」や「アクティブ・ラーニング」、「入学前学習」などについて、いくつかの成果を挙げる事ができた。

### 1. 初年次教育

本報告書執筆担当の澤が、本学FD委員として、大学コンソーシアム京都FDフォーラム企画検討委員に任命され、分科会のコーディネイトを担当することとなった。それに合わせて本研究プロジェクトとしても、情報交換を行い、検討を進めてきた。

2008年に出された文部科学省中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」での初年次教育の定義は、「初年次教育とは、高等学校から大学への円滑な移行を図り、大学での学問的・社会的な諸経験を“成功”させるべく、主として大学新入生を対象に作られた総合的教育プログラム」としている。この答申以降、ほとんどの大学で初年次教育が実施されている。しかし、定着が進む一方で、歴史が浅いだけでなく、大学においては専門領域同士でも教育観について意見が分かれることも多く、課題も山積している。大学の規模や学部構成（文系・理系、あるいは教養系・資格取得系など）、学内の体制、学生の学習習慣の定着状況によっても、かなり相違点が出てくる。さらに、大学で合意形成がなされ、一度カリキュラムが定着しても、中等教育の改訂や学生の気質など、時代の変化により、また新たな変革が必要になってくる。そういう意味で10年を経過し過渡期を迎えた今日、「持続可能な」初年次教育を考える機会となった。

なお、フォーラムに招いたスピーカーのうち

山本氏については、2014年3月に本プロジェクトのメンバー4名で参加した、日本文理大学由布院研修所におけるオフキャンパス研修の主催を担当者であった。大学の規模や学習集団の状況が総合社会学部の抱える問題と類似しており、取組の苦慮についても深く知ることができたことは意味が深かった。一方で、初年次教育だけでなく大学教育に全体でも徹底した学生への指導と教員の全体合意形成を確立している関西国際大学については、本学での導入は厳しいものの、カルテ作成や学生評価、授業改善など、参考になることは多くあった。

### 2. アクティブ・ラーニング

本研究がスタートした契機ともいえるのは、2012年8月の文部科学省中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」（質的転換答申）である。「従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見出していく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要」と指摘しているように、今後の大学教育では、従来の知識詰め込み型中心の教育から、学びの意味を学生に分かりやすく理解させ、学生と教員が相互に知性を高める学生主体型の学士課程教育に換えていくことが重要であるとしている。2015年8月には、小・中・高校の次期学習指導要領の改訂に向けた教育課程企画特別部会による論点整理でも「アクティブ・ラーニング」への転換の

必要性が記され、避けて通れないこととなっている。

本プロジェクトでは、1～2ヶ月に1度程度、京都産業大学、長浜バイオ大学、聖泉大学、京都ノートルダム女子大学とのPBL研究会に参加し、意見交換をしてきた。ここでは研究代表者の中村が報告した内容を記しておく。

授業設計の段階について、授業方法のアクティブ化と教育目標のアクティブ化については区別し、さらに車の両輪のように相互に必要なことを認識することが重要である。また、それぞれの学習方法について、アクティブが適するものと適さないものがある。例えば公式や単語など正解がある学習は適さないが、正解が一つではない、柔軟な思考やコンピテンシーの育成がはかられる内容については、取り入れやすい。

「アクティブ」という言葉についてもさまざまな解釈ができる。「動き」だけがアクティブでは思考が伴わない。レシピどおりに料理を作る、教員の指示に従ってワークシートを作成するなどの類いは、見た目だけのアクティブといえるので、「行動」や「思考」をアクティブにする必要があるだろう。

さらにアクティブ・ラーニングでは協働的学習の形態が求められる。グループワークの段階として次の5つが考えられる。

#### ①グループ作り

グループがコミュニティとして成立するための準備であり、怠ると後の段階に響く。

#### ②思考の外在化

個人のイメージを言語化して、具体的記述に落とし込む作業。ブレインストーミングが代表的。

#### ③思考の共有化（グループ内）

グループで意見をするが、意見をグループで一つにまとめるのではなく「シェア」することが重要。

#### ④発表のまとめ

グループワークの発表は、グループでの議論をすることにより、ワークの振り返りとなるだけでなく、グループで理解が異なることの確認にもなる。

#### ⑤思考の共有化（グループ間）

同じテーマで同じ作業をしても、グループ間で内容が異なることを知る。

### 3. 入学前学習

澤が所属する総合社会学部では、大学全体で実施しているプレエントランスデーを独自に2月に実施している。これは、初年次教育担当者からの学生の学習習慣定着状況や、総合社会学入門Ⅰの授業での文章力の情報を入手し、初年次教育では補完できない内容を入学前に実施するプログラムである。

総合社会学部に入学する学生の出身高校と大学との学習評価に関する大きな相違点は、授業に出席していてもある程度の学力（主に大学では論述式問題に耐えうるだけの文章表現能力）が問われる。周知のとおり、大学では多くの教員がシラバスで明記している評価方法として、テストにせよレポートにせよ論述力となっている。特に、出席だけ真面目にしているも単位の修得が出来ないこともあることを、学生には認識させなければならない。

本学部で2015年度（2016年度入学生）に実施したプログラムは下記のとおりである。

#### ①第1回プレエントランスデー

担当：高橋講師、川嶋講師

コース毎に選んだ新聞記事を読み、400字で自分の意見を述べる

#### ②自宅学習課題

自分が大学で専攻する内容にふさわしい新聞記事を10日間で1つ選び、同様に自分の意見を論述する

#### ③第2回プレエントランスデー

担当：大西講師、澤

午前 1つのテーマ（2015年度は大西講師による「同性愛を法律で認めるか否か」）の講義を聴き、新聞記事や動画を見て、グループ内で賛成・反対意見を書き出す

午後 午前中の作業を基に、自分の意見を800字でまとめる

このプレエントランスデー企画にあたっては、2015年度入学生のアンケートも参考にした。2015年秋に実施した大学生活春学期を振り返っ

での調査では、高等学校では自分の意見を述べる場面が少ないため、表現力よりも意見をもつことが入学後に役に立ったという回答を得た。これは自己肯定感の有無との関連は指摘できるが、ある一定の訓練も必要という結論に至った。

また、今年度は「型書き」の論述指導を実施した。これは、初年次教育学会のワークショップや自由研究発表で報告された手法である。20行の作文用紙について「問題提起」や「根拠の提示」「予想される反論への考え」「結論」についてそれぞれ行を提示するものである。この指導では、NHK－Eテレ「テストの花道」（小論

文は型で勝て）を視聴させ、実際の論述に取り組んだ。

プレエントランスデー後の評価は、形式・書式を中心に添削を行い、ループリックをつけて返却した（下表参照）。大学によっては入学前学習について、全入学生を対象に3月中旬に実施している。しかし本学部ではAO・推薦入試の入試区分学生のみへの実施となっている。今後は一般入試を経て入学する学生の成績状況や論述能力などを見極めて、対象学生を広げるなどの課題もあると思われる。

ループリック評価表      ～第1回 新聞記事～

	よくできました！	もう少し！	残念
「～である」調の文章	文章の全体が「～である」調で書かれている。	「～です・～ます」調で書かれている部分が数カ所ほどある。	「～である」調と「～です・～ます」調が混在している。
漢字	文章全体で漢字が適切に使われ、誤字・脱字がない	数カ所ほど、漢字が使われていない、または誤字・脱字がある。	漢字で書く努力をしていないまたは誤字・脱字が目立つ。
文字の丁寧さ	文字がとても読みやすくきれいに書かれている。	文字が薄かったり雑だったりして少々読みにくい。	文字になってない。
文字数	文章が8割以上埋められており内容も充実している。		求められた文字数の8割以上が埋まっていない。
主語と述語	主語と述語の関係が正しく記されている。		主語と述語の関係がねじれている部分がある。
1文の長さ	1つの文の長さが適切に区切られている。	1つの文が長い部分がある。	
新聞記事	新聞記事をまっすぐに切って、ていねいに貼ってある。		新聞記事をまっすぐ切ってない、または斜めに貼っている。

## ループリック評価表

## ～第2回 同性愛を法律で認めるか否か～

	よくできました！	もう少し！	残念
「～である」調の文章	文章の全体が「～である」調で書かれている。	「～です・～ます」調で書かれている部分が数カ所ほどある。	「～である」調と「～です・～ます」調が混在している。
漢字	文章全体で漢字が適切に使われ、誤字・脱字がない	数カ所ほど、漢字が使われていない、または誤字・脱字がある。	漢字で書く努力をしていないまたは誤字・脱字が目立つ。
文字の丁寧さ	文字がとても読みやすくきれいに書かれている。	文字が薄かったり雑だったりして少々読みにくい。	文字になってない。
文字数	文章が8割以上埋められており内容も充実している。		求められた文字数の8割以上が埋まっていない。
主語と述語	主語と述語の関係が正しく記されている。		主語と述語の関係がねじれている部分がある。
1文の長さ	1つの文の長さが適切に区切られている。	1つの文が長い部分がある。	
根拠	あなたの考えの根拠が文中に示されている。	あなたの考えが何を根拠にしたかわからない。	